



「死んでいい」という遊びをめぐる考察

目羅 藍

私たちの養護学校では、子どもが自主的に始める遊びを中心に、日々の生活を営んでいます。子どもの遊びといっても、その根底には子どもの抱えているテーマや願いが流れていて、その奥の深さに、時どき「遊び」と呼んでいいものかと迷うことがあります。

本誌第一〇九巻第五号で同僚(清水哲、以下S先生)が紹介した、N君の「死んでいい」という遊びもそうでした。大好きな先生に「死ぬ(じつと寝る)」ことを要求し(その際「死んでいい」と言う)、せっせと葬儀のようなことをして、別れの過程を体験しているようでした。それはN君が六年生の一学期の時に始まり、二学期に数回ただけで、そのうちしなくなりました。

三学期になって復活

卒業を控えた三学期が始まり一週間経ったある朝、登校したN君は、突然「死んでいい」と言いました。言われたのは、ずっと担任をしているS先生と元担任である私の二人。N君が二人分の布団と枕を用意して「はい! 死んでいいよ」と言うので、私たちは潔く「死に」ました。

N君は、クラスルームの扉を閉めて電気を消し、寝ている私たちに自分の服を掛け、好きな音楽を選曲して空間を整えます。次に、水を入れたコップを枕元に置き、濡らしたタオルを私たちの額に当てます。その

後は、おもちゃを私たちの周りに並べたり、音楽に合わせて一人で踊ったり、ノートや黒板に何か書いたりしています。その間、大人は「死んでいる」ので何もできません。時どき私たちが本当に寝ているのか確認しながら、結局三時間近く遊んでいました。その日から一か月ほど、この遊びは続きました。

遊びの中に見られた変化

一、二学期の時と比べると、違う点が三つあります。一つめは、これまでは大人と二人きりでしたが、今回は必ずS先生と私の二人（計三人）を必要とした点です。二つめは、N君が看病している様子から、大人は死ぬ役ではなく病人の役である点です。どちらも、大人が話したり動いたりすることが許されない状況は同じです。三つめは、N君自身の明るさです。以前は大人に「死ぬ」ことを必死に求めていましたが、今回は目を輝かせて、「死んでいい」やろうね！」と期待している様子でした。

遊びをとらえる二つの目

約一年かけ断続的に行われたことや、N君にとって特別な存在である大人を必要とすること、また、「死」という言葉を使うことを考えると、そこには何か大切な意味が含まれているように思えました。このことについて、S先生と私は何度か話し合いをしました。

私はすぐに「死と再生」という言葉が浮かびました。なぜなら、N君のいままでの人間関係や生活を考えると、いつも大事な人との別れが色濃く刻まれており、それはN君にとって一方的な別れであることが多かったからです。N君は別れに対して敏感に反応し、たとえば私との別れ際のあいさつは「さようなら、またね」の代わりに、「もう会えないよ」と悲しそうに顔で言うのです。私が「また遊べるよ」と言っても、毎回「もう会えない」と言うN君は「本当にまた会えるのだろうか」と不安なのでしょう。この「死んでいい」遊びは、そのN君が自ら手放すこと（＝死）をするだ

けでなく、自らの手でよみがえらせる（＝再生）という体験もしているのです。その根底に、N君の人生の大きなテーマがあるのだと思いました。

一方S先生は、これまでは、N君が大切な人との別れを主体的にとらえ直し、目の前にある関係性を再確認しているのではないかと考えていました。しかし今回は、卒業を控えたN君の中で、次の世界へ出発する準備ができてきつたのではないかと感じていました。

微妙に異なる視点でかわっていましたが、「これは何かものすごく大事な遊びだ」と直感的に感じていたことは一致していました。この遊びをやり切れるようにしたいという方向性も一致していました。

遊びの意味を探る落とし穴

子どもの遊びの意味を探っていく時、複数の大人の目で見るとは、自分の見解に偏ってしまうのを防ぎ、遊びをより多面的にとらえ、より豊かにしてくれるものだと思います。しかし、その遊びの奥ばかりに目を

向け過ぎると、解釈が先に立ち、子どもが「いま」「している」ことを見落としてしまう危険があるような気がします。

「している」ことを中心に遊びをとらえ直してみると、大人を寝かせた後にN君は、着替える・選曲して歌って踊る・掲示物を貼り直す・ハサミやセロハンテープを使って工作をする・黒板に字を書く・クラスメイトのロッカーをきれいにする・友達に手紙を書くなど、自分一人の力で実にいろいろなことをしていました。クラスルームに来た友達とは大人を介さずにコミュニケーションしていたのには、驚きました。この遊びの空間はN君そのもので、くるくると表情を変えながら、水を得た魚のように自由でした。

僕を信じてほしい

私たちは「死んでいる」という動けない、口が利かない状況なので、ただ成り行きを黙って見ているだけでした。これこそN君が大人に求めていたことで、

「死んでいい」というのは、「僕のやることに口を挟まないで見ていて」「つまり、僕を信じて」と言っているのではないだろうかと私は考えるようになりました。

学校生活の中では、N君と友達の問題はあったり、物しようが、N君が突然友達をたたいてしまったり、物を投げてほかの子どもにけがをさせてしまったりすることがあり、それらはたいいていN君が一人でいる時や、大人が目を見守る時に起こるのです。担任はこれ以上トラブルを避けるために、常にN君と行動を共にする態勢をとるようにしました。N君は自分のことを信じてもらえてないと思っていたのかもしれませんが、このような状況を背景に考えると、N君が遊びの中で、大人に「死ぬ」ことを求めたわけがわかるような気がします。

信頼すべし

ただひたすら「死ぬ」ことに徹しようと大人が覚悟

を決めたあたりから、N君はこの遊びをしなくなりました。また、帰り際のあいさつが「もう会えない」から、笑顔で「また会える？」と言うようになりました。

子どもの遊びはその子の内面を映し出しています。その意味を探りながらかわる時、遊び自体がより深まる場合があります。しかしその一方で、意味を求め過ぎず、子どもの「力を込めて自分で何かをする体験が未来への自信と希望をつくり出す力」^注になると大人が信じ、ただひたすら「いま」を一緒に遊ぶことも大切なのだと気づかされました。N君の遊びを過去や背景から切り離し、大人がその子の現在をきちんと受け止めようとした時に、N君の心は満たされ、この遊びを必要としなくなったのではないかと考えています。

(愛育養護学校小学部)

注(引用文献)

『新しく生きる——津守真と保育を語る——』

津守真・浜口順子 編著 フレーベル館 p. 133